

〔海外レポート〕

国際シンポジウム 「歯学教育における臨床シミュレーション」の出席報告

歯学部歯科保存学第II講座教授

松田 浩一

国際シンポジウム「歯学教育における臨床シミュレーション」が、去る1990年10月6～9日ボルチモア（メリーランド州，アメリカ）にて、メリーランド大学とウエストバージニア大学との共催で開催されました。今回私は、主催者の要請を受けたデンタル・シミュレーション・トレーニング・システム研究会（12国公立歯科大学と2歯科材料・機械メーカーで構成されている）の推薦を受け、このシンポジウムに招かれ、発表する機会を得ました。そこで、ここに本学で行なっている臨床シミュレーションの紹介も含めて報告します。

本学の臨床シミュレーション

歯学教育において臨床教育実習は重要な位置を占め、現在ほとんどの大学で専門過程の5、6年次に行なっています。臨床実習は、患者との接触を通して、日常高頻度に遭遇する口腔疾患の予防、診断および治療の基本を修得させるとともに、将来、歯科医療あるいは歯科医学の研究に携わるものとしての心構えと責任感を育成することに主眼をおいて行なわれています。しかしながら患者実習と講義、模型実習、臨床予備実習の間にはかなり隔たりがあり、学生が円滑に移行できないことが多々みられます。

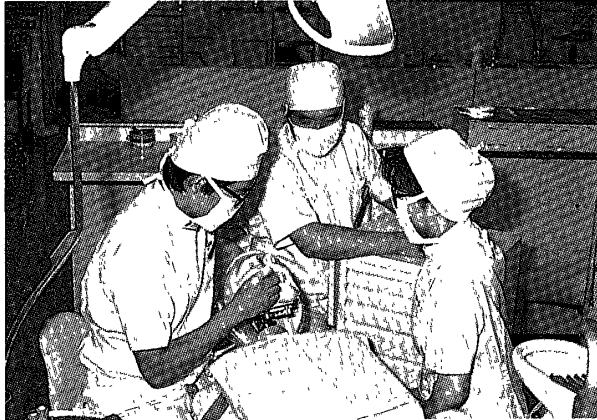
そこでこれらを補うものとして本学では、臨床予備実習におけるシミュレーション教育に着目しました。これまで、シミュレーション教育としては4年次から5年次に臨床科目における模型実習、いわゆるマネキン実習がありました。

しかし使用しているマネキン、咬合器、人工歯などは簡略化されたもので生体に程遠いものがあります。

そこで本学においては、今までの研究成果も参考にしつつ、昭和62年度より歯科保存学、歯科補綴学、口腔外科学、歯科矯正学の各講座が共同して、シミュレーション教育に用いる本学独自のマネキン、模型の開発を行なってきました。本学ではこれをPre-Clinical-Training-System略してPCTシステムと呼んでいます。この実習システムは、生体に近似した頬顎粘膜などの軟組織、および歯、顎骨などの硬組織を有し、かつ下顎運動を再現する咬合器を装着したマネキンを用いて行なっています。各科に必要な形態、機能、軟組織および硬組織を交換することによって、各科ごとの一連の術式と、材料、器具の取扱いとともに一口腔単位の治療計画、診療を修得させようとするものであります。

歯学教育のゴールへの一里塚

このシンポジウムは、世界で最も古い歴史を持つメリーランド大学歯学部の百五十周年記念の一環として催されました。この大学は、「歯学教育のパイオニア」を誇りとして、大変教育に力を注ぎ、その特色とするところが、今回のシンポジウムのテーマである「臨床シミュレーション」であります。このような企画を、記念行事の一環としてやるのは大変良いことに思いました。参加者は112名そのうちアメリカ合衆国以外の国からは58名で、ヨーロッパ、南北アメリカ、



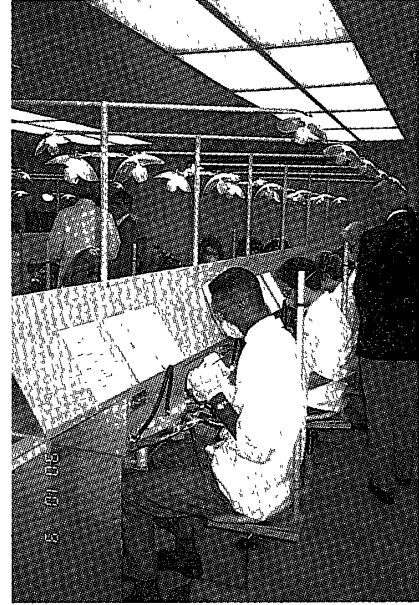
本学のPCTシステムによる実習

ニュージーランド、アフリカ、アジアからであります。ただし、アジアからは私一人でした。

このシンポジウムの内容は、サブタイトルに示されているように“精神運動性スキル獲得のための概念、方法、器械および施設、です。

基調講演では、診療行為をパフォーマンスの面から、概念→シミュレーション→現実の診療行為ととらえ、いかに正確で責任あるパフォーマンスを行なうにはどのようにしたらよいか話がされました。

一般講演では、パフォーマンスを行なうための精神運動性スキル獲得の概念、方法、器械および施設に関して19の講演が行なわれました。その内容は、(1)術者、患者にとって、自然でバランスのとれた診療行為を行なうにはどのようにしたらよいか。(2)それをどのように教えたら教育効果が上がるか。(3)そのシミュレーション・パフォーマンスを実習するシミュレーターはどのようなものがよいか、が論じられました。私にとって非常に参考になりました。私は、シミュ



メリーランド大学のシミュレーション実習

レーターとそれをどのように教育に取り入れているかを話しました。本学のシミュレーターマネキンに関しては他と比較して私には優れたものに思えました。しかし、今後はさらに、シミュレーション・パフォーマンスの概念、方法についてさらに検討していく必要があります。

今回の国際シンポジウムのCo・DirectorのMichael M. Belenkyが、「このシンポジウムは歯学教育のゴールに向けての一里塚」と言われましたが私も同じ思いでありました。アメリカや世界各国の歯科大学がどんなに歯学教育に力を入れ、それぞれ特色ある教育を行なうかを競い協力し合っているかを強く感じました。それは我が大学の将来にとっておおいに参考になると思われます。